

ゲツェ・マハーパンディタによる 「サムイエの宗論」論考

檜 殿 伴 子

1. はじめに

周知のように、「サムイエの宗論」とはティソン・デツェン王 (Khri srong lde btsan, 742-797) 時代のチベットで、中国仏教側を代表するハーシャン・マハーヤーナ (摩訶衍) とインド仏教側を代表するカマラシーラの間で行われた論争を指す。勝敗については、チベット仏教の伝統では前者を敗北者、後者を勝者と為し、この「宗論」の結果、チベット仏教史を通じて、インド仏教を正統とし、中国仏教は排斥されることとなった。

この結果のあおりを被ったのが、ニンマ派のゾクチェンとカギユ派の大印である。とりわけ、サキヤ・パンディタ (Sa skya Paṇḍita, 1182-1251) は、『三戒区分』 (*sDom gsum rab dbye*) において、ゾクチェンと大印 (*mahāmudrā*) をハーシャンの教えとして説き¹⁾、この見解は後世に多大な影響を及ぼした。本稿はチベット仏教ニンマ派のゲツェ・マハーパンディタ・ギェルメ・ツェワン・チョクジュブ (dGe rtse Mahāpaṇḍita 'Gyur med tshe dbang mchog grub, 1761-1829) による『三戒区分』についての批判的考察を取り上げる。ゲツェ・マハーパンディタの特徴的思想は大中観他空説であり、彼は、『三戒区分註』においても、大中観他空説を展開する。本稿では「宗論」をめぐる中国禪とニンマ派批判に対する彼の反論を明らかにする。

2. サムイエの『宗論』——原因と結果

ゲツェ・マハーパンディタは、中国仏教の起源から説き始め、インドから渡ったボーディダルマ (Bodhidharma, 達磨大師, 5-6 世紀) を祖とする中国の禪宗をインド源流の仏教として正当化し、中国禪を正当化することによって、ゾクチェンの正当性を立証しようとする。まず、彼はインドから中国へ伝来した般若波羅蜜の教えの三伝統について説明する。一つ目は、弥勒とアサンガなどの「広大な行の

ゲツェ・マハーパンディタによる「サムイエの宗論」論考（榎 殿） (39)

系統」(*rgya chen spyod pa'i brgyud pa*), 二つ目は、ナーガールジュナ (*Nāgārjuna*) などの「甚深な見解の系統」(*zab mo lta ba'i brgyud pa*) —— 頓門 (*tun min; gcig car 'jug pa'i sgo*) と漸門 (*tsi yan min; rim gyis 'jug pa'i sgo*) を含む²⁾ ——, そして、三つ目が「成就の伝統・意味の系統」(*sgrub brgyud don gyi brgyud*) であり、それぞれが「純粋な起源」を持っていると述べる³⁾。この三番目が禅であり⁴⁾, 「ニンポ (心髄・蔵)⁵⁾ の意味の系統」(*snying po don gyi brgyud*) とも言われ、ナーガールジュナからアーリヤデーヴァ (*Āryadeva*) に伝えられ⁶⁾, ボーディダルマが中国人の弟子に伝授したのは、「ニンポの意味の教え」であり⁷⁾, 彼は「サイン (*brda*) を説示して質問に回答するという方法で、大印のメンガ (*man ngag*, 師から弟子への要の教え) を与えた⁸⁾ とゲツェ・マハーパンディタは説明する。さらに、ゲツェ・マハーパンディタは、「宗論」でハーシャンとカマラシーラの間で繰り広げられた論争を再現し、カマラシーラとハーシャンは、共に菩薩地にあったと以下の記述の中で解説する。

瞑想師 (すなわち、ハーシャン) として知られている者は宗門 (*tsung ming*) の伝統保持者であり、メンガを実践することを主とする者達であって、前述した宗門の五番目⁹⁾ から派生したと知られているが、中国の歴史においては、この師匠についてははっきりとは記されていない。しかし、いずれにせよ、波羅蜜のメンガの意味を伝える系統 (*don brgyud*) の伝授、文字と言葉を超えた直接的意味そのものをチベットの僧侶達に伝授したとき、以前に、(シャータラクシタ) 教授の弟子達、すなわち、バ・イエシェ・ワンポ (*dBa ye shes dbang po*), ペル・ヤン (*dPal dbyangs*) あるいはバ・ラトナ (*sBa ratna*)¹⁰⁾ など、両馬車 (すなわち、ナーガールジュナとアサンガ) の典籍伝統を主にする学者達は (ハーシャンの教えを) 理解せず、相違が生じたので、判断を明確にするためにインドから教授 (シャータラクシタ) の教えの伝統を保持する弟子であるカマラシーラがチベットに招待された。そのとき、サムイエで、阿闍梨ハーシャンと対面したとき、カマラシーラが棒を頭上で三度回すという仕草 (*brda*) で、三界における輪廻の原因を尋ねた。偉大なハーシャンは衣服の二つの裾を手で摺んで揺するという仕草 (*brda*) で「所取と能取の二つである」という回答を示した、と言われている。これを吟味すると、両方の師匠 (カマラシーラとハーシャン) が聖者の地 (すなわち、菩薩地) に住していたことは議論の余地がない。というのは、四弁¹¹⁾ (*pratisamvid, so so yang dag pa'i rig pa*) を獲得しているからだ。そのとき、カマラシーラ師匠と瞑想師が論争したとき、インドの師匠 (カマラシーラ) は、通常、遍く知られている偉大な (ナーガールジュナとアサンガ) の両馬車の追隨者であったので、(彼の) 見解を経証と理証に関連づけ、行を全時に関連づける法を主にした。一方で、瞑想師が承認したメンガは、論理と言葉によって示される対象ではなかった。瞑想師の立場は、否定と肯定の増殖に元来従事しないので、一時的に、カマラシーラの伝統のみが権威を持ち、ハーシャン瞑想師は、帰還した¹²⁾。

上記にあるように、ゲツェ・マハーパンディタがハーシャンの教えについて強

(40) ゲツェ・マハーパンディタによる「サムイエの宗論」論考（榎 殿）

調することは、ハーシャンの教えが、文字と論理を超えているということである。

3. ハーシャンの教えの二つの問題点

次に、ゲツェ・マハーパンディタは、カマラシーラがハーシャンの教えについて指摘した二つの問題点、すなわち、福德資糧の放棄と、等引時の無作意 (*amanasikāra, yid la mi byed*) について解説する¹³⁾。福德資糧については、行 (*caryā, spyod pa*) としての六波羅蜜のうち、最初の五波羅蜜と最後の般若波羅蜜を此岸と彼岸に区分し、布施などの五波羅蜜に関しては、有縁の善根は積むが、此岸にとどまっており、他方、無縁の智慧である般若波羅蜜が把握する無漏の善根によって彼岸に赴くと説く。

この点について、カマラシーラとハーシャンの真の意図は同じであったと述べ¹⁴⁾、カマラシーラは当時のチベット人の弟子たちの器に合わせて説示しただけであったと解釈する¹⁵⁾。

さらに、ゲツェ・マハーパンディタは、物事の真理を明らかにするときの研究姿勢について問い質す。

一般的に、ここチベットで、無意味なものとして知られる一切のことが起った後、実直な心で詳細に吟味せず、有名な者のみに追従する一切の伝統に普く昔から固執しているので、賢者として知られている有名な者達も、差別（の心）で覆われていたり、後世の論理学に慣れ親しんでいる者達は、瞑想師の法の伝統と、それと同じ法語がどこで現れても、それら一切を間違った、汚れた法と見なして、聞いただけで耳を覆うようなことをするので、実際には、大乘の法を捨てる（際の）第六と第九番目の根本墮罪¹⁶⁾（のために）奮闘して重荷を背負っている者達がたくさん生じているように見えるのだが…¹⁷⁾。

次の記述の中では盲目的に権威に追従する姿勢を批判する。

一般に、また、ハーシャン瞑想師の立場であると主張されて、たくさんの増益が話されたが、彼（ハーシャン）の典籍の伝統すべての総意として確立されたものを土台にして、論争するのはいい。彼の典籍の伝統は、（チベット仏教の）前伝期のときに隠されたこと、『バシエ』 (*rBa bzhed*) に記されているように、後世の者達が『バシエ』などで、彼（ハーシャン）の立場にあるものを論敵にして繰り返すのは、吟味していない以外のなにものでもなく、否認すべき典籍が何なのかを実際に見ないで、『バシエ』などに記載されていることを証拠なく拝んでいるだけだからだ¹⁸⁾。

4. 無作意について

無作意に対する批判についての回答の中で、ゲツェ・マハーパンディタは等引 (*samāhita, mnyam gzhag*) の際に思惟 (*vitarka-vicāra, rtog dpyod*, 尋伺) は必要ないと論じる¹⁹⁾。

ゲツェ・マハーパンディタは思惟を観瞑想と区別し、等引の際の無思惟を仏教の正統の教えとして説く²⁰⁾。さらに、ゾクチェンもハーシャンの教えと同様、福德の資糧を捨てるという批判を退け²¹⁾、「ゾクチェン実践者も本性が行為を離れた（あるがままの）在り方に等引することにおいて、正道の諸法が無努力で完成される」と承認する、と説く²²⁾。また、ハーシャンの等引の際の無思惟を、無為の法性に等引することと解釈し、有為の福德に固執することはその障害となるので、無思惟だからといって、福德資糧を放棄しているわけではないと説く²³⁾。

5. 他空説と無思惟

最後に、ゲツェ・マハーパンディタが彼の他空説をこの「宗論」の解説に適用する方法について述べる。他空説は如来蔵説と密教の実践を中核にする教義である。『三戒区分註』でも、これらを他空説の基盤としつつ、ここではさらに無思惟を他空説と関連づけている。まず、ゲツェ・マハーパンディタは密教に説かれる法性と顕教の第三法輪に説かれる「如来蔵」を同一と説明する²⁴⁾。さらに、ゲツェ・マハーパンディタにとって、法性とは、無としての空性ではない。上記で問題にされた等引の際の思惟と無思惟についての論議は自空と他空の方法の違いでもある。ゲツェ・マハーパンディタは思惟をめぐる自空では悟得できない、あるがままの在り方を「他の方法の空性」、すなわち他空として示唆する。彼は、シャンティデーヴァの『入菩薩行論』(9.33)を引用して、次のように注釈する。

無存在の空(性) (*ci yang med pa'i stong pa*) を放棄して、さらに、それよりももっと甚深な空性 (*zab pa'i stong pa nyid*) を修習すると説かれているので、とくに、密教追随者として承認されながら、(五) 蘊を分析する自空 (*rang stong*) のみより、もっと大きく、甚深な、他の方法の空性を認めないなら…分割できない基²⁵⁾・果²⁶⁾の大印と、すべての相を備えた空性 (*rnam pa thams cad kyi mchog dang ldan pa'i stong nyid*) と、あるがままの仏母般若波羅蜜などの特質が無になってしまう。自空だけではそれらを理解することができないからだ²⁷⁾。

(42) ゲツェ・マハーパンディタによる「サムイエの宗論」論考 (楨 殿)

6. おわりに

ここに語られたゲツェ・マハーパンディタの主張は、ハーシャンという個別的事例についての論証であるが、その主張は単純明快であり、時代と場所を超えた普遍の真理について語っていると思われる。というのは、彼が物事を判断するときの基準や研究姿勢についても問うているからだ。伝承に無批判に盲従する姿勢への批判や、自分が理解できないことを他人のせいにして否定するという態度について彼の批判は向けられている。しかしながら、ゲツェ・マハーパンディタ自身もまた、伝承に頼り、批判者と共有する同じ伝承を、批判者とは逆に肯定的かつ自派に有利に解釈する論法を取っていると指摘できる。ゲツェ・マハーパンディタにとって、「宗論」の勝敗を決定した理由は、ハーシャンの教えに問題があったからではない。ハーシャンは、聴取者の器に関わらず、真理を直接説示したが、「宗論」の参会者達の中にはハーシャンを理解できる者がいなかったために敗北とされたとゲツェ・マハーパンディタは主張していると筆者は解釈する。

- 1) Rhoton 2002: 118-119, 303-304, 金剛戒の巻 167-175 偈頌.
- 2) 『三戒区分註』 p. 157.6.
- 3) 『三戒区分註』 p. 156.6-7.
- 4) 『三戒区分註』 p. 158.1-2.
- 5) 『三戒区分註』 で用いられるニンポ (*snying po*) の語はすべて如来蔵を意図して用いられていると解釈できる.
- 6) 『三戒区分註』 p. 158.2.
- 7) 『三戒区分註』 p. 160.6-7.
- 8) 『三戒区分註』 p. 160.3-4: *brda bstan pas dris pa la lan ldon pa'i tshul du phyag rgya chen po'i man ngag byin nas.*
- 9) 禅宗の第五祖は弘忍 (601-674) である.
- 10) バ・イエシエ・ワンポ (バ・サルサン *sBa gsal sang* と呼ばれる) とペル・ヤン (バ・ラトナとも呼ばれる) は共に、8世紀の人物で、シャーンタラクシタから最初にサムイエで受戒した七僧に含まれる (『名前辞典』 pp. 1257-1258).
- 11) 四弁には、法 (*chos*), 意味 (*don*), 語源 (*nges pa'i tshig*), 能弁 (*spobs pa*) がある.
- 12) 『三戒区分註』 pp. 162.5-163.6.
- 13) 『三戒区分註』 p. 163.6-7.
- 14) 『三戒区分註』 pp. 163.7-164.4.
- 15) 『三戒区分註』 p. 164.7.
- 16) 第六番目の根本墮罪は教えを誹謗すること (*chos la smod pa*), 第九番目は自性清浄の諸法に疑いを抱くこと (*rang bzhin dag pa'i chos la the tshom za ba*) である. 『蔵漢大

ゲツェ・マハーパンディタによる「サムイエの宗論」論考（槇 殿） (43)

辞典』(vol. 1, p. 2207, s.v. *rtsa lhung bchu bzhi*) 参照.

- 17) 『三戒区分註』 pp. 165.6-166.2.
- 18) 『三戒区分註』 p. 171.1-3. ゲツェ・マハーパンディタ自身もハーシャンの典籍を見ていたと思われないということについて示唆していただいた大谷大学教授福田洋一先生に謝意を表す.
- 19) 『三戒区分註』 pp. 167.3-168.1.
- 20) 『三戒区分註』 p. 169.2-5.
- 21) 『三戒区分註』 p. 174.6-7.
- 22) 『三戒区分註』 p. 177.5-6.
- 23) 『三戒区分註』 pp. 175.7-176.2.
- 24) 『三戒区分註』 p. 117.2-4.
- 25) 『三戒区分註』の文脈上、基は客塵に覆われた如来蔵を指すと考えられる.
- 26) ここでは、果は如来蔵の顕現としての法性を指すと考えられる.
- 27) 『三戒区分註』 p. 131.3-6.

〈参考文献〉

一次文献

ゲツェ・マハーパンディタ 『三戒区分註』 *dGe rtse Mahāpaṇḍita. sDom pa gsum gyi rab tu dbye ba'i bstan bcos chen pos snga 'gyur phyogs la rtsod pa spong ba 'dus ma byas kyi gan mdzod. dGe rtse Mahāpaṇḍita'i gsung 'bum*, vol. 6, fols. 1-40, pp. 109-188. Chengdu: Bod yig dpe myin myur skyob, 2001.

『藏漢大辞典』 *Bod rgya tshig mdzod chen mo*. Beijing: Mi rigs dpe skrun khang, 1993.

『名前辞典』 *Gangs can mkhas grub rim byon ming mdzod*. Qinghai: mTsho dngon mi rigs par khang, 1992.

二次文献

Rhoton, Jared Douglas, trans. 2002. *A Clear Differentiation of the Three Codes*. Written by Sakya Pandita Kunga Gyaltshe. Albany: State University of New York Press.

(平成 14-16 年度科学研究費補助金基盤研究 C (課題番号 26370057) による研究成果の一部)

〈キーワード〉 サムイエの宗論, ハーシャン・マハーヤーナ (摩訶衍), 『三戒区分』 (*sDom gsum rab dbye*), 中国禪, ゾクチェン, マハームドラー (大印), ゲツェ・マハーパンディタ, 大中観他空説, 自空, 他空, 如来蔵, 密教
(身延山大学東洋文化研究所研究員)